

貝 庖 丁 の 再 検 討

——神奈川県三浦市間口洞窟遺跡出土例を中心に——

神 澤 勇 一

1

貝庖丁⁽¹⁾はアワビの殻の断片で製作した弥生時代の貝製利器の1種である。一般に長楕円形または長方形を呈する器体の一辺に磨製の刃が付き、胴部に2個対をなす穿孔があって、素材の性質上多少彎曲をもつ点を除けば形状、大きさとも石庖丁に酷似しているところから、この名称が与えられた。

貝庖丁の存在は、昭和24～26(1949～1951)年にかけて三浦半島の海蝕洞窟遺跡を調査した赤星直忠博士によって紹介され、三浦市南下浦町毘沙門B洞窟、同・毘沙門C洞窟、および三浦市向ヶ崎町向ヶ崎B洞窟の諸遺跡から合計44例の出土が報告された。⁽²⁾ やがて三浦市南下浦町松輪大浦山洞窟遺跡、その他で次第に類例が増え、貝庖丁は三浦半島の海蝕洞窟遺跡のうち弥生時代後期初頭を占める久ヶ原期の生活址に伴う、かなり地域性の強い遺物と考えられるに至った。同時に石庖丁との形態的類似、南関東地方における石庖丁の稀少性、漁撈生活の形跡顕著な海蝕洞窟遺跡内における出土などの諸点から、貝庖丁は石庖丁に代わる穂摘具であり、南関東地方内陸部の農耕集落へ供給する目的で生産されたものであろうと推定されたのである。⁽³⁾ 当時としては注目すべき説であり、南関東地方の石庖丁問題は解決するかと思われた。ところが、筆者はかつて貝刃研究の参考として貝庖丁を観察した際、明瞭な使用痕を残す例があることに気付き、とりあえず本館収蔵品13例を検討したところ、大部の刃部、穿孔部、峰部に磨滅が認められ、刃の欠損箇所を磨き直した例さえあった。検討結果の詳細は「神奈川県立博物館研究報告第1巻第3号」に報告したとおりで、貝庖丁は海蝕洞窟居住者が自らの必要に応じて生産、使用したものであり、内陸部との交易を目的とした生産物とは考え難いという結論に達した。しかし、なにぶんにも少数例による結果であり、当然のことながら資料の増加を待って、改めて確認する必要があると感じたのである。

その後、昭和46(1971)年から49(1974)年に、三浦市南下浦町松輪に存在する間口洞窟遺跡を発掘調査した際、貝庖丁100余例が出土し、ある程度まとまった資料が得られた。それらの整理の進行に伴い、新たに幾つかの注目すべき事実が知られたほか、前述の研究報告の内容について、多少補足修正を要する部分が生じてきたのである。そこで未だ検討究明を要する点はあるが、ここに概要を報告し、併わせて間口洞窟遺跡出土例を中心に、若干の所見を述べたいと思う。

2

間口洞窟遺跡は神奈川県三浦市南下浦町に存在する。入口幅約5メートル、奥行10メートル以上を測る比較的大型の海蝕洞窟で、内部には弥生時代中期宮ノ台期から江戸時代に至る間の数時代の遺物包含層と遺構が2～2.5メートル堆積している。遺跡の状態については「神奈川県立博物館発掘調査報告書」に譲り本稿では省略するが、貝庖丁はほとんどが最下層の黄褐色ローム質土層上に堆積する宮ノ台期の遺物包含層(10層・11層)と、落磐岩塊層を隔ててその上方に堆積する、久ヶ原期の遺物包含層(8層)中から出土したもので、ほかに後世の攪乱個所から、原位置を離れたものが少数出土している。なお、宮ノ台期に属する貝庖丁が確認されたのは、これが初めてである。

間口洞窟遺跡における貝庖丁の出土例数は、神奈川県立博物館発掘調査報告書第6号～第9号の記載数の合計では、貝庖丁118例・未製品6例となるが、その後破片が接合したり、資料整理の進行につれ新たに未製品と確認できた資料やアワビ製刃器ではあるが貝庖丁の範疇に含めるのは不适当と認められるものが知られてきたので、最終的には貝庖丁94例・未製品11例となった。

時期別出土例数は、貝庖丁が、宮ノ台期68例・久ヶ原期18例・時期不明6例、未製品が宮ノ台期5例・久ヶ原期4例・時期不明2例である。貝庖丁は宮ノ台期にも存在することが明らかになった。なお、久ヶ原期の出土例数が著しく少ないが、本遺跡においては同期の遺物包含層の大半が、古墳時代から奈良時代にかけて行なわれた洞窟内墳墓の築造その他後世の攪乱により、失なわれていることによると考えられる。原状を保つ部分における単位面積当りの出土例数では、ほとんど差を認め難い。

次に遺存状態は、94例中、完形6例、器体の全形を十分把握し得る程度の破損品13例、他は2分の1以下の各種破片である。貝庖丁の多くは、平面16×14cm～19×15cm大の大型のアワビの殻を、長軸方向に半截した断片を素材に製作されている。したがってアワビの種類をほとんど確認し難いが、遺物包含層中からメカイアワビとマダカアワビの殻が大量に出土し、両者は大きさ、形態、殻の厚味が酷似するので、選別することなく使用したと考えてまず誤りないであろう。

以下、本論に入る前に記述の都合上、資料の説明、集計等を行う際、次のような表示方法をとることにしたのでお断わりする。

(1)個々の資料の主要データは「表1資料計測表」に一括した。資料番号は本文、表、実測図および図版に共通とし、ゴシック体の数字で表示した。(2)間口洞窟遺跡出土例と比較資料の他遺跡出土例は実測図と図版を別にする予定であったが、縮尺と紙数の関係でやむを得ず混載し、資料番号もまた、通し番号を与えた。(3)器形や各部分を説明する場合、上下左右は刃を下に向け貝殻の内面を手前にした状態で指示し、器面の区別は貝殻自体の内面、外面に従った。(4)刃は両刃をA形、片刃をB形、貝殻外唇の先端を僅かに調整しただけの自然形に近い刃、類自然縁刃をC形として、表示した。図版4——6・12・5参照。

3

間口洞窟遺跡出土の貝庖丁94例は、器形の基本的特徴、各部の形状、穿孔の有無、素材に使用された断片の種類（貝殻の部分）その他によって分類すると、三群に大別出来る。それらに、仮にa群、b群、c群の名称を与えた（各群は、後述する三浦半島海蝕洞窟諸遺跡から出土した貝庖丁の比較結果に基づいた新分類のうち、a群はそのⅠ類、b群はⅡ類、c群はⅤ類に相当する。そこで、他遺跡出土例との比較を考え、表、図及び図版では新分類の名称で表示してある。いささか煩瑣であるが、ご容赦願いたい）。各群の特徴その他は次のとおりである。

a群（Ⅰ類）

器体が扁楕円形、胴張り長方形、または隅丸長方形に類する形態で、穿孔が本来2個あるもの（第1図——1・3・5・6～10、第2図——11・12・14・17・21、第3図——25～30、図版1——1・3・10・14）。

94例中73例（77.66%）がa群に属する。本群は器体の大きさ、各部の形状、加工手法、整形程度にかなり変化をみせる。しかし、いずれも貝殻を長軸方向に半截した外唇を含む断片を素材にしている。外唇を除き周縁にこまかな敲打を加えて器体を形成したのち一部研磨整形を施し、外唇に刃を付けるのが特徴である。器体は、断片のうち彎曲が強く外縁が肥厚する螺塔部付近を避け、先端寄りの部分で製作する傾向が著しいが、大型品では螺塔部付近まで使用したものも認められる。

代表的な器形を示す例は1・3・5・8・9である。器体の大小を別にすれば本群の約3分の2はこの種の器形に属する。ほかに、これらより一回わり小型で器体の長さに比べ胴の幅が広く、寸詰まりの長方形を呈するもの（11・12・21）もあるが、数的には少ない。なお、14は、他の貝庖丁の内外面が自然面のままであるのに対し、1例だけ全面平滑に磨き上げられて真珠光沢を放つ例外的精製品である。

a群の器体の大きさは、完形品と一部破損品および大型破片による想定復原の結果では、器体の幅と長さが4.5×13cm前後の大型品と4×11cm前後の中型品が大部分を占め、前者の方が傾向的に幾分多いと考えられる。なお図示しなかったが、1.9×4.7cmの小型貝庖丁が1例ある。⁽⁴⁾ ミニチュアか実用品か断定し難い。

刃はすべて研磨により付加したもので、両刃（3・6・9・10・17）、片刃（1・12）、類自然縁刃（5・16）の3形式が認められる。両刃は、一般に刃先断面がいわゆる蛤刃状を呈し、外面側が多く研磨される傾向がある。片刃は、刃先断面がノミ状を呈し、すべて外面側が研磨されている。鋭利な刃が比較的多い。類自然縁刃は、自然の外唇部と比べ差がほとんどない刃である。外唇末端にごく僅かな研磨調整を施し、刃先を揃えた程度にすぎない。

類自然縁刃をはじめ、刃は全体に簡素である。アワビの殻の外唇の形状が本来刃に近く、もちろん使用目的如何にもよるにせよ、特に入念な刃の付加や整形を、さほど必要としなかったためであろう。例えば、類自然縁刃は、小型の殻から得た薄い断片を素材に使用した貝庖丁にほぼ限られている。この推定を裏付けるものと思われる。

刃先は一般にゆるやかな外湾を示すが、幅は変化が多い。大別すると、①外唇全縁にわ

たる場合(1・6・17), ②両端に接した1~2cmの部分を除き, ほぼ全縁にわたる場合(3・8・9), ③外唇全縁から側面のなかば付近にまで及ぶ場合(14・21・30), ④特に刃のために突出させた部分だけに限られる場合(10), の4通りになる。これらのうち一般的な形は①と②で, ③は中型品や補修再生品に目立ち, ④は10の1例である。なお, 約半数は, 刃先に製作時のそれとは明らかに識別可能な, 使用によって生じた擦痕, 磨耗および欠損を残す。

穿孔は例外なく内外両面からあけている。一般に直径5mm前後であるが, 直径3mm程度の小さな穿孔も, 中型以下の貝庖丁に少数みられる。穿孔の数と配置は, 2個が胴部中位に並列するのが基本形で, 間隔は大型品の場合6~6.5cm, 中型品の場合は5~5.5cmの間に集中する。器体の大小による使い勝手の違いから自然に生じたものであろうが, 或は一定の規格が存在した可能性を考えてよいかも知れない。

これに対し, 14・15・21・25・26のように3個以上の穿孔が不規則に散在する例や, 6のように2孔の間隔が異常に近くしかも位置の片寄った例がある。それらの中には, 研磨調整された周縁の一部に古い穿孔の痕跡が残るもの(21・25)が存在するところから, 破損品の再生や, 再三の刃の付け直しで穿孔と刃が接近したため, 新たに穿孔を設けた結果と理解できる。左右のほぼ同位置にある穿孔の間隔に前述の数値をあてはめると, 対をなす穿孔の識別は或る程度可能である。

穿孔と刃の間隔が, 5や31のように異常に接近したものもある。このうち5に類する例の場合は, 器体の長さに比べ胴の幅が特に狭いから, おそらく手に持ったさい楽に使用できるだけの面積を確保するためであろう。31に類する例の場合は, 刃が一般に普通の位置(外唇に直接する部分)より相当奥にあり殻がぶ厚な部分に付いているので, 再三の研ぎ直しの結果, 穿孔付近まで移動したものと解される。

穿孔は約4分の3に貫通部周縁の磨耗が認められ, 両面から穿孔されるため当初V字形の断面であった周縁先端が, 丸くなっている。貫通部周縁が歪み, 穿孔外縁と同心円状をなさない場合も少なくない(1・3・9・12)。穿孔外縁とその周辺にも, 磨耗と変形個所がしばしばみられる。図版4の部分拡大写真12・17における穿孔の状態はその一例である。これらが使用によって生じたことは明白であろう。

上縁(峰)は一般にゆるやかな弧を描くが, 整形状態には①器体形成時の敲打痕が整形されぬまま, 鋸歯状をなしている場合(1・3・16), ②粗く研磨されていて, 丸味を帯びた不規則的な凹凸をなしている場合(6・9・17・21), ③十分研磨されて滑らかになり, ときに上端が平面をなす場合(5・8・10・24)の3種類があり, それらの中間的な場合も認められるが, ①と②が最も多く, ③は約4分の1である。なお②と③については図版4の部分拡大写真17・24を参照されたい。

上縁の穿孔直上の部分には, 研磨による幅1cm前後の浅い凹所や, そこから左右の端にかけ敲打(更に研磨されている場合もある)による小さな肩が付けられている例が少ない。凹所の例を図版4の部分拡大写真1・5に示した。このような凹所は, 1・3・5・6・9・11その他, 合計29例(39.75%)に認められる。図版4に示した26は肩の一例で, 敲打のあと研磨されている。肩は凹所に比べ少い。

同様な凹所や肩は穿孔直下の刃の側にも付けられていることがあり, 中には凹所と肩の併用もみられる。只一例だけ突出した刃をもつ10の左右両端の形状は, その変形であろう。

明らかに人為による凹所や肩を欠く例でも、同じ位置にしばしば磨滅が生じている。このような凹所、肩、磨滅は、それらの位置から考えて、穿孔の機能を補う紐掛けのための加工、損耗と理解される。なお穿孔とは別に、貝庖丁を持ちやすくする目的で、上縁全体に何らかの「あてがい」、例えば布、獣皮、樹皮その他を取り付けたことも有り得るから、或はそうした「あてがい」を紐で固定するための加工、或は固定したため摩擦によって生じた磨滅という可能性も完全には否定し難い。目下のところ積極的な形跡や証拠はないが、一考の余地はあろう。

ここに一括した74例は、以上に述べた如く個体差が目立つが、冒頭に挙げた諸特徴を共有するので、独立した一群と認めて支障ないを考える。

b群(Ⅱ類)

器体が細身の出刃庖丁の身に類似した形態で、穿孔が2個あるもの(第2図——18・19・20。図版2——18)。94例中8例が本群に属する。

すべて貝殻を長軸方向に半截した内唇を含む断片を素材とし、彎曲が強く内唇の肥厚が著しい螺塔側を避け、もっぱら前溝寄りの部分が選ばれている。外唇側断片を素材とするa群もこの傾向を示すが、外唇に比べ一段と厚い内唇部を使用するb群においては特に著しい。本群は内唇を上縁(峰)とし、内唇を除き周縁にこまかな敲打を加えて器体を形成したのち、孔列側(殻の中心側)に刃を付けるのを著しい特徴とする。

完形品は1例(18)だけで、他はほぼ全形を察知し得る破損品1例と小破片であるが、各例の部分的形状から推せば、ほぼ18に類した器形をとるらしい。器面は内面外面とも自然面のままである。大きさは18が $4.3 \times 12.3\text{cm}$ 。破損品が $4 \times 9.3\text{cm}$ を測る。a群における大型品と中型品に相当しよう。

刃は、すべて研磨により付加されており、形式別では両刃1例、片刃5例、不明2例である。両刃は20の1例だけであるが、刃先きはV字形を呈し、きわめて鋭い。片刃には外面を研磨したもの(18・19ほか3例)と内面を研磨したものがあるが、後者は破損品に1例あるにすぎない。やや特殊な例であろう。片刃は両刃に比べ刃の造りが雑で、刃先断面が鈍いノミ状を呈する。b群には当然ながら類自然縁刃は存在しない。

刃先きは、ゆるやかな弧を描いて外彎するもの(18)と比較的強い外彎を示すもの(19・20)とに別れる。前者は2例、後者は3例を数えるが、絶対数が少いのでこの結果をもって、直ちに比率を決めることは出来ない。

刃は18の場合、右側の穿孔直下から左端の内唇付近まで付いており、ほぼ全形を察知し得る破損品でも同様な傾向が伺われる。しかし、内唇側の特に殻の薄い部分を素材にした19は、刃が右端内唇付近まで及んでいるので、半円状に刃が付けられたい。本例にも、刃先きに、明らかに使用の結果生じたと認められる欠損と磨滅がある。

穿孔はすべて内外両面から行われている。穿孔間隔は18が 5.8cm 、破損品が 4.3cm で器体の長さに比べやや短い。いずれも右側の穿孔の位置が多少下っているが、これは穿孔しにくい厚い内唇を避けた結果である。本群の上縁はいずれも自然の形状のままで、穿孔直上の部分に幅 1cm 前後の人為的な凹所または磨滅個所がある。同様な凹所と磨滅は刃の側にもあり、a群のそれと異ならない。

b群は、素材の選択と利用法に強い個性を示すが、本質的にはa群と共通したところが多い。

c 群 (V 類)

器体が長方形に類する形態で、穿孔が無いもの(第3図・図版2——31)。94例中3例であるが、穿孔を欠く点が注目される。

図示した31のほかは小型2品例であるが、多少差異をもつため、以下、小型—I、小型—□と呼んで区別したい。3例とも貝殻を長軸方向に半截した外唇を含む断片を素材とし、外唇を除き周縁に内面からこまかな敲打を加えて器体を形成、外唇を研磨して刃を付けている。31と小型—Iの素材は前溝寄りの断片で、前者は器体が大きいので左端が孔列末端に掛る。小型—□は螺塔付近の断片で、全体にぶ厚い。c 群は穿孔を欠くため一見未製品の如き感があるが、明瞭な刃をもち、刃先きその他に使用による磨滅と欠損が認められる。

31は器体の大きさが $5.6 \times 13.6\text{cm}$ 。小型の2例は、I が $3.3 \times 8.1\text{cm}$ 、□が $3.6 \times 8.0\text{cm}$ で、差がほとんどない。刃は31とI が両刃で、断面が蛤刃状を呈し、研磨の程度が比較的良く、鋭い。□は、おそらく類自然縁刃として誤りないと思われるが、刃先きの欠損が著しく断定し難いため、一応不明とした。

上縁は、いずれも器体形成期の敲打痕に粗い研磨が加えられており、やや丸味をもった不規則的な凹凸をなしている。31は上縁右端に幅 1.6cm の「えぐり」があり、刃の側の相対する位置に幅 1.5cm 、奥行 1cm の半円形の「えぐり」がある。また、左端は上下とも肩状をなし、いずれも内側の縁に磨滅が生じている。なお本例の刃の中央と、その右側——「えぐり」部に接する部分——に半円形の欠損が認められるが、縁が磨滅して丸味を帯びており、欠損後も特に刃を研ぎ直すことなく使用したことが知られる。小型品I・□では、ともに左右両端の上縁と刃の側に、幅 0.8cm 前後の凹所がある。しかし、Iの左端、刃の側にある半円形の凹所以外は、使用によって生じた磨滅かと疑うほど浅い。31の「えぐり」と小型品の凹所もまた、a 群、b 群のそれと同じく紐掛けのための加工と考えられる。31の「えぐり」と肩は他群に例のない大きなものであるが、穿孔の機能をも兼ねさせるためであろう。一方、小型品I・□の凹所が形ばかりであるのは、器体が小さいことによるものと考えられる。

4

a 群、b 群、c 群は、いずれも宮ノ台期(中期)と久ヶ原期(後期)に属する例がある(「表2」)。両時期における各群の例数と比率は次のとおりである。

宮ノ台期(68例)

a 群55例=80.88%。b 群6例=8.82%。c 群2例=2.94%。

久ヶ原期(18例)

a 群11例=61.11%。b 群2例=11.11%。c 群2例=11.11%。

間口洞窟遺跡の場合、遺物包含層の残存量が異なるため例数では宮ノ台期と久ヶ原期の差は大きい、両時期において各群が占める比率はほぼ同じ傾向を示し、いずれもa 群が主体をなしていることがわかる。

次に、貝庖丁の機能と密接な関係をもつ刃の形式別をみると、「表3」のとおり、両刃(A形)が最も多く、片刃(B形)と類自然縁刃(C形)がほぼ同数を示し、宮ノ台期、久ヶ原期のいずれにおいても変化がない。また各群における刃の形式別比率は、宮ノ台

期、久ヶ原期とも両刃はa群(I類)に集中し、b群では片刃(B形)が主体をなすもの
のようである。類自然縁刃(C形)の比率は、宮ノ台期と久ヶ原期では逆転しているが、
資料の絶対数が少ない点を考慮すれば、実際にはほぼ同程度と見做してよからう。以上の結
果、間口洞窟遺跡の宮ノ台期と久ヶ原期における貝庖丁の代表的種類は、「a群のうち両
刃の付いたもの」と認められる。

ここで、未製品が11例出土しているので簡単に触れておきたい。

11例中9例は、すべて大割りした素材に敲打を加え、貝庖丁としての形と大きさに整えた
ものである。第3図——32はその一例で、刃、穿孔、凹所・肩は設けられていない。他の
2例は第3図——33・34で、外唇を除き周縁に敲打整形が加えられており、内面に穿孔の
痕跡があるが、刃と凹所・肩は設けられていない。穿孔内には、同心円状の細い条線が認
められる(図版3——34)。なお、穿孔を中止した痕跡は完成品中にもしばしばあるが、
すべて内面に限られ、外面には全くない(第1図・図版4——1, 第3図——28・29)。穿
孔に使用した工具は、先端の丸い錐状のものであろうが、具体的な形状や穿孔法は不明で
ある。ただ図版2——11の例では、穿孔の周囲に穿孔と同心円をなす傷痕があり(第1図
——4の毘沙門C洞窟遺跡出土例にも、穿孔の周囲に直径1.3cm同心円状の擦痕が認めら
れる)、安定のために何らかの支えが使用されたのではなかろうか。

いま挙げた諸例からみて、貝庖丁の製作工程は①素材の割り取り、②器体の形成(外唇
または内唇を除く周縁の敲打整形)、③穿孔(内面次に外面)、④凹所または肩の加工、⑤
刃の付加という順になる、と考えられる。

5

筆者は前の研究報告で、毘沙門B洞窟遺跡、毘沙門C洞窟遺跡および向ヶ崎B洞窟遺跡
出土の13例を中心に、貝庖丁を次の1～4類に分類した。

1類・胴張りの長方形ないし扁楕円形を呈し、穿孔が2個あるもの(第1図——2・4)。

2類・胴張りの長方形にちかい器形を呈し、穿孔が1個あるもの(第2図——23)。

3類・つまみ状の突起が付いた異形品で、穿孔が2個あるもの(第2図——22)。

4類・1類に類似した器形を呈し、穿孔がないもの。

間口洞窟遺跡出土の諸例をこの分類に照らしてみると、a群は明らかに1類に一致する。
本群は間口洞窟遺跡出土の貝庖丁の主体をなしているが、これは出土遺跡は異なっても、
1類が圧倒的多数を占める事実とも一致する。しかし、2類、3類、4類に該当するもの
は認められない。これに対し、b群はこれまで知られなかった一群である。なお4類につ
いては、当時既に貝庖丁であるか否か疑問があることを指摘しておいたが、資料が増加し、
貝庖丁の諸特徴が明らかになった現時点においては、貝庖丁の範疇に入れ難いので除外す
る。

以上の結果から、ここで貝庖丁を器形、刃の種類、穿孔、素材の種類等を中心に再分類
を行うことにした。今後の資料の増加により、多少変更を生じる部分もあると思われるが、
目下のところ5類に分類するのが妥当と思われる。各類の主要な特徴を挙げると、次のと
おりである。

I類＝器体が扁楕円形，胴張り長方形または隅丸の長方形に類する形態で，穿孔が2個あり，外唇を含む断片で製作されたもの（a群・旧1類）。

II類＝器体が細身の出刃庖丁の身，または半円形に類似した形態で，穿孔が2個あり，内唇を含む断片で製作されたもの（b群）。

III類＝つまみ状の突起が付いた異形品で，穿孔が2個あり，外唇を含む断片で製作されたもの（旧3類）。

IV類＝胴張りの長方形に類する形態で，穿孔1個とこれに代わる肩を持ち，外唇を含む断片で製作されたもの（旧2類）。

V類＝器体がI類に類似した形態で，穿孔を欠き，代りに両端に「えぐり」，肩，または凹所があり，外唇を含む断片で製作されたもの（c群）。

これら各類のうち，III類とIV類は例が少いが，個性的な器形と性格を備えており，一群をなすものと認めて差しつかえないと思われる。なお，IV類は三浦市南下浦町大浦山洞窟遺跡からも1例出土している。⁽⁶⁾

貝庖丁は三浦半島における弥生時代海蝕洞窟諸遺跡に出土が知られる独特のアワビ製刃器である。その存在については，石庖丁と形態的類似と漁撈生活の形跡が濃厚な海蝕洞窟遺跡から多数出土すること，さらに南関東地方に石庖丁がほとんど出土しないなどの点で，かつて石庖丁の代用として南関東地方内陸部へ供給するために製作されたものと考えられていた。

ところが筆者の前回の研究結果では，明瞭な使用痕を残す例が認められた。さらに今回の間洞窟遺跡出土例においても多数の資料に，明らかに使用によって生じた損耗が認められ，再製品が存在することも知られた。貝庖丁が海蝕洞窟居住者自身により製作，使用されたことは，ここに確実に言ったと言える。

しかし，貝庖丁の機能・用途については，今回の検討でも明確な答を引き出せなかった。ただ，あえて推定すれば，貝庖丁は石庖丁と形態が酷似している点で，穂摘具の可能性がやはり最も多いと思われる。三浦半島には石庖丁の一般的素材である粘板岩が産出せず，また石庖丁と同じく粘板岩で製作される磨製石鏃の代わりに，同形のアワビ製貝鏃が出土していることから考えられる。貝庖丁が形態的に石庖丁と最も異なる点は穿孔間隔がきわめて広いことであるが，これは貝殻の彎曲による不利をカバーするためであろう。もし，貝庖丁が石庖丁と同様に穂摘具であるとすれば，海蝕洞窟居住者の生活形態は半農半漁と考えざるを得ない。十分考えられることではあるが，民俗例には海草の採取にアワビ，トコブシその他貝殻の使用が知られる。現在の民俗例を直ちに結び付けることは不当であるけれども，貝庖丁が三浦半島の海岸に豊富なアラメ，カジメ，ワカメ，テングサ等の海草の採取に使用されたという場合も，一応考慮の余地がある。

また，海蝕洞窟遺跡からは第3図に示したように，貝庖丁以外に斧形貝器，ナイフ形貝器，貝刃，磨製貝刃その他の貝製刃器が多数認められ，器種と素材の間に一定の組合わせを示し，かなり機能的分化が進んでいることを伺われる。貝庖丁の用途や在り方を解明するためには，貝庖丁自体の分析もさることながら，この種の貝製刃器との関連を明らかにしつつ追及することが，今後の課題となろう。

(本稿執筆については、横山昭一氏、国学院大学々生矢野慎一・菊田成海・田中裕美の諸氏から一方ならぬ協力を頂いた。また、図版写真は本館の井上久美子技師に負うところが大きい。稿を終わるに当り、記るして謝意を表する次第である)。

注

- (1) 「庖丁形貝器」を指す。型式論的には妥当ではないが、筆者が以前に発表した研究報告(「貝包丁に関する二三の考察」)との関連で、本稿では「貝庖丁」の名称を使用する。
- (2) 赤星直忠「海蝕洞窟——三浦半島に於ける弥生式遺跡——」神奈川県文化財調査報告第20集 神奈川県教育委員会 昭和28(1953)年。
- (3) 「石庖丁と同様に稻等の穂をつみとるためのものと思われる。漁民生活に不適當な農具がこの洞に多数あったことは彼等が之を作っていた事を語るもので、恐らく物々交換に用いられたものであろう……三浦半島の弥生式遺跡から石庖丁の出土しないのは海蝕洞窟にいた弥生式人があわび貝製庖丁を製造して農民に供給していたからだと考える」(注2文献)・「石庖丁の発見例のほとんどない東海地方以東で、石庖丁の代りに使用されたと見られる」日本考古学協会編「日本考古学辞典」(森貞次郎「貝庖丁」の項)東京堂出版株式会社 昭和37(1962)年。
- (4) 神澤勇一「貝庖丁に関する二三の考察」神奈川県立博物館研究報告書第1巻第3号 昭和54(1970)年。
- (5) 神澤勇一「間口洞窟遺跡」神奈川県立博物館発掘調査報告書6～9号 昭和47～50(1972～1975)年。
- (6) 赤星直忠・岡本勇「関東地方の洞穴遺跡」日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会 昭和42(1967)年。

表 1 資料計測表

分類	挿図	図版	資料 番号	寸 法 縦 × 横 cm	刃の 形式	穿孔間 隔 cm	出土遺跡 層 位	時 期 (細別時期)	摘 要
I 類	1	1	1	4.2×12.1	B	6.4	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	穿孔痕 1 個。 右側穿孔付近。
〃	1	1	3	5.1×14.0	A	7.3	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	1	—	5	3.1×11.2	C	5.6	間口洞窟 第 8 層	後 期 (久ヶ原期)	
〃	1	—	6	5.7×(9.2)	A	—	間口洞窟 攪乱部	不 明	左端の穿孔 2 個は対 をなすとは認め難 い。
〃	1	—	8	5.4×(9.7)	B	6.2	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	1	—	9	5.5×10.7	A	6.2	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	1	1	10	4.7×12.3	A	5.0	間口洞窟 第 11 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	2	3	11	4.0×(8.5)	A	5.4	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	2	—	12	3.8×(8.0)	B	5.0	間口洞窟 第 8 層	後 期 (久ヶ原期)	
〃	2	1	14	(4.4)×(9.1)	A	4.8	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	器面全面研磨。 再穿孔により孔数 5 個。穿孔間隔は対を なす 2 孔による。
〃	2	—	15	(4.6)×(8.9)	A	4.6	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	2	—	16	4.4×(8.8)	C	—	間口洞窟 攪乱部	不 明	
〃	3	—	17	3.4×(7.6)	A	—	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	3	—	21	4.3×(7.0)	B	—	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	再穿孔により孔数 4 個。穿孔間隔は対を なす 2 孔による。
〃	3	—	25	(2.5)×(4.0)	不明	—	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	3	—	26	(3.8)×(4.0)	A	—	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	
〃	3	—	27	(4.6)×(6.6)	B	—	間口洞窟 第 8 層	後 期 (久ヶ原期)	
〃	3	—	28	(3.5)×(5.4)	A	—	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	穿孔痕 1 個。 右側穿孔直下。
〃	3	—	29	(4.6)×(6.3)	A	—	間口洞窟 第 10 層	中 期 (宮ノ台期)	穿孔痕 1 個。 左側穿孔直上。
〃	3	—	30	(3.8)×(5.4)	A	—	間口洞窟 第 11 層	中 期 (宮ノ台期)	

分類	挿図	図版	資料 番号	寸 法 縦 × 横 cm	刃の 形式	穿孔間 隔 cm	出土遺跡 層 位	時 期 (細別時期)	摘 要
I類	1	—	2*	5.5×11.0	C	5.5	毘沙門B 洞窟	後 期 (久ヶ原期)	
//	1	—	4*	6.5×13.8	A	8.1	毘沙門C 洞窟	後 期 (久ヶ原期)	
//	1	—	7*	6.4×(12.5)	B	5.3	毘沙門B 洞窟	後 期 (久ヶ原期)	
//	2	3	13*	4.2×(6.5)	A	1.8	毘沙門B 洞窟	後 期 (久ヶ原期)	
//	3	—	24*	(4.6)×(10.7)	B	4.6	毘沙門B 洞窟	後 期 (久ヶ原期)	
II類	2	2	18	4.3×12.3	B	5.8	間口洞窟 第11層	中 期 (宮ノ台期)	
//	2	—	19	(4.0)×(4.0)	B	—	間口洞窟 第8層	後 期 (久ヶ原期)	
//	2	—	20	(4.0)×(5.6)	C	—	間口洞窟 第10層	中 期 (宮ノ台期)	
III類	2	2	22*	6.8×10.1	B	3.4	向ヶ崎B 洞窟	後 期 (久ヶ原期)	
IV類	2	2	23*	5.4×14.1	A	—	毘沙門B 洞窟	後 期 (久ヶ原期)	
V類	3	2	31	5.6×13.6	A	—	間口洞窟 第8層	後 期 (久ヶ原期)	
未製品	3	—	32	4.5×10.3			間口洞窟 第8層	後 期 (久ヶ原期)	
//	3	—	33	3.9×9.3			間口洞窟 第10層	中 期 (宮ノ台期)	内面右端に穿孔未了 痕跡1。
//	3	—	34	(3.3)×(3.3)			間口洞窟 第10層	中 期 (宮ノ台期)	内面右端に穿孔未了 痕跡1。

(注) 本表中*印は他遺跡出土参考資料である。

参考 資料	挿図	図版	資料 番号	種 別	寸 法 cm	出土遺跡 層 位	時 期 (細別時期)	摘 要
24	3	—	①	斧形貝器	9.0×5.2×0.5	間口洞窟 第10層	中 期 (宮ノ台期)	アワビ製
25	3	—	②	ナイフ形貝器	6.9×4.5×0.7	間口洞窟 第10層	中 期 (宮ノ台期)	アワビ製
26	3	—	③	搔器形貝器	4.5×6.6×0.7	間口洞窟 第8層	後 期 (久ヶ原期)	アワビ製
	3	—	④	磨製貝刃	6.8×5.2×1.8	間口洞窟 第10層	中 期 (宮ノ台期)	ハマグリ製
	3	—	⑤	貝 刃	8.2×6.4×2.1	間口洞窟 第10層	中 期 (宮ノ台期)	ハマグリ製

表 2 貝庖丁各類の時期別例数（間口洞窟遺跡出土資料）

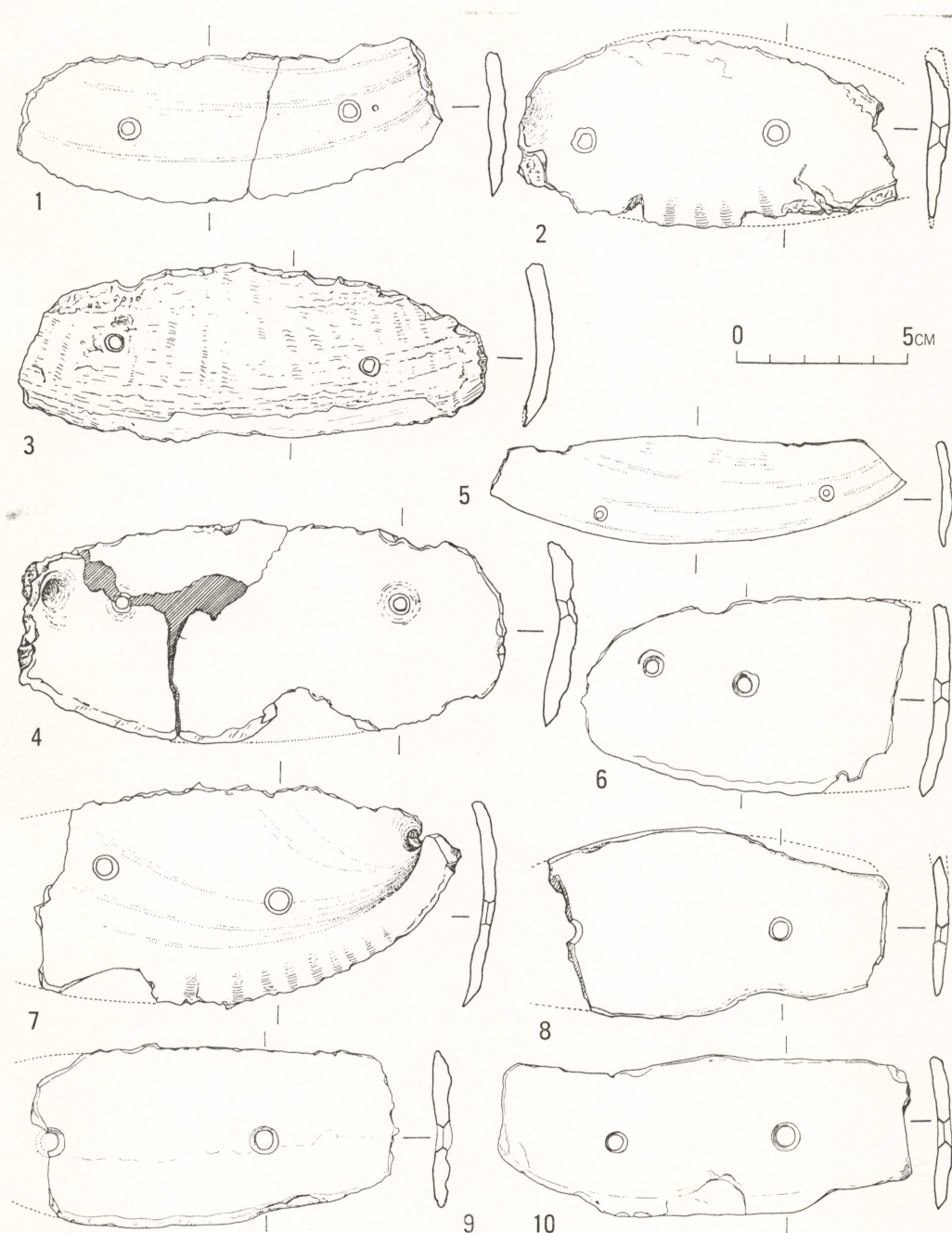
時期 \ 形態	I 類	II 類	III 類	IV 類	V 類	不 明	計 (%)
後 期	11	2	0	0	2	3	18 (18.95)
中 期	53	8	0	0	1	6	68 (72.34)
時 期 不 明	7	0	0	0	0	1	8 (8.51)

表 3 貝庖丁各類の刃の形式別例数（間口洞窟遺跡出土資料）

形態 \ 刃の形式	A 両 形刃	B 片 形刃	C 形 (類自然縁刃)	不 明 (欠損・欠失)	形態別合計
I 類	30	14	14	13	71
II 類	1	7	0	2	10
III 類	0	0	0	0	0
IV 類	0	0	0	0	0
V 類	2	0	0	1	3
不 明	3	1	3	3	10
刃の形式別合計 (%)	36 (38.30)	22 (23.40)	17 (18.09)	19 (20.21)	94 (100)

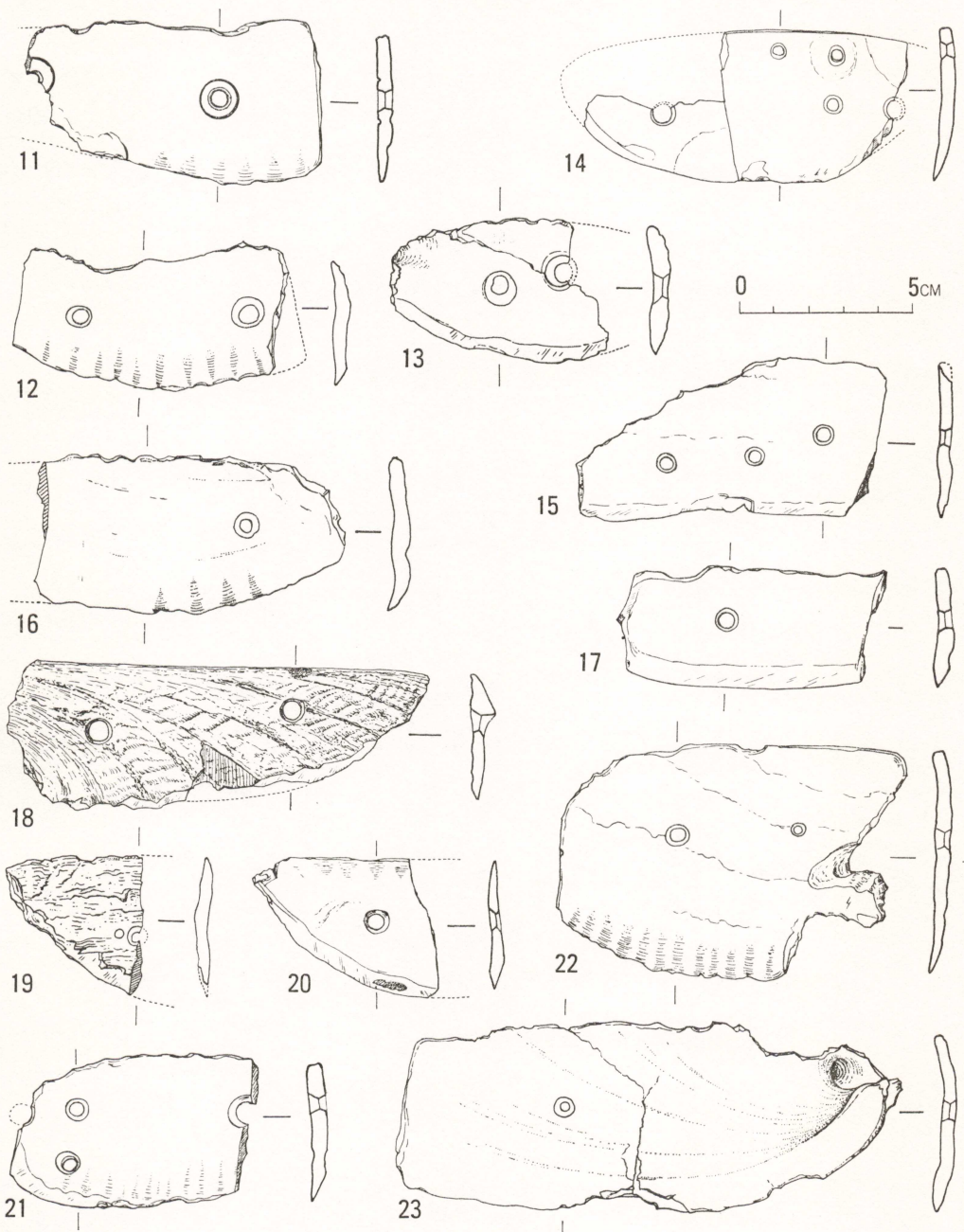
表 4 刃の形式の時期別例数（間口洞窟遺跡出土資料）

時期(%) \ 刃の形式	A 両 形刃	B 片 形刃	C 形 (類自然縁刃)	不 明 (欠損・欠失)	時 期 別 資 料 合 計
後 期	4 (22.22)	7 (38.39)	3 (16.67)	4 (22.22)	18
中 期	27 (39.71)	15 (22.06)	13 (19.12)	13 (19.12)	68
時 期 不 明	5 (62.50)	0 (0)	1 (12.50)	2 (25.00)	8



第1図

類別 I 類=1・2・3・4・5・6・7・8・9・10.
 時期 中期(宮ノ台期)=1・3・9. 後期(久ヶ原期)=2・4・5・7.
 時期不明=6.
 出土遺跡 間口洞窟遺跡=1・3・5・6・8・9・10. 毘沙門B洞窟遺跡=2・7.
 毘沙門C洞窟遺跡=4.

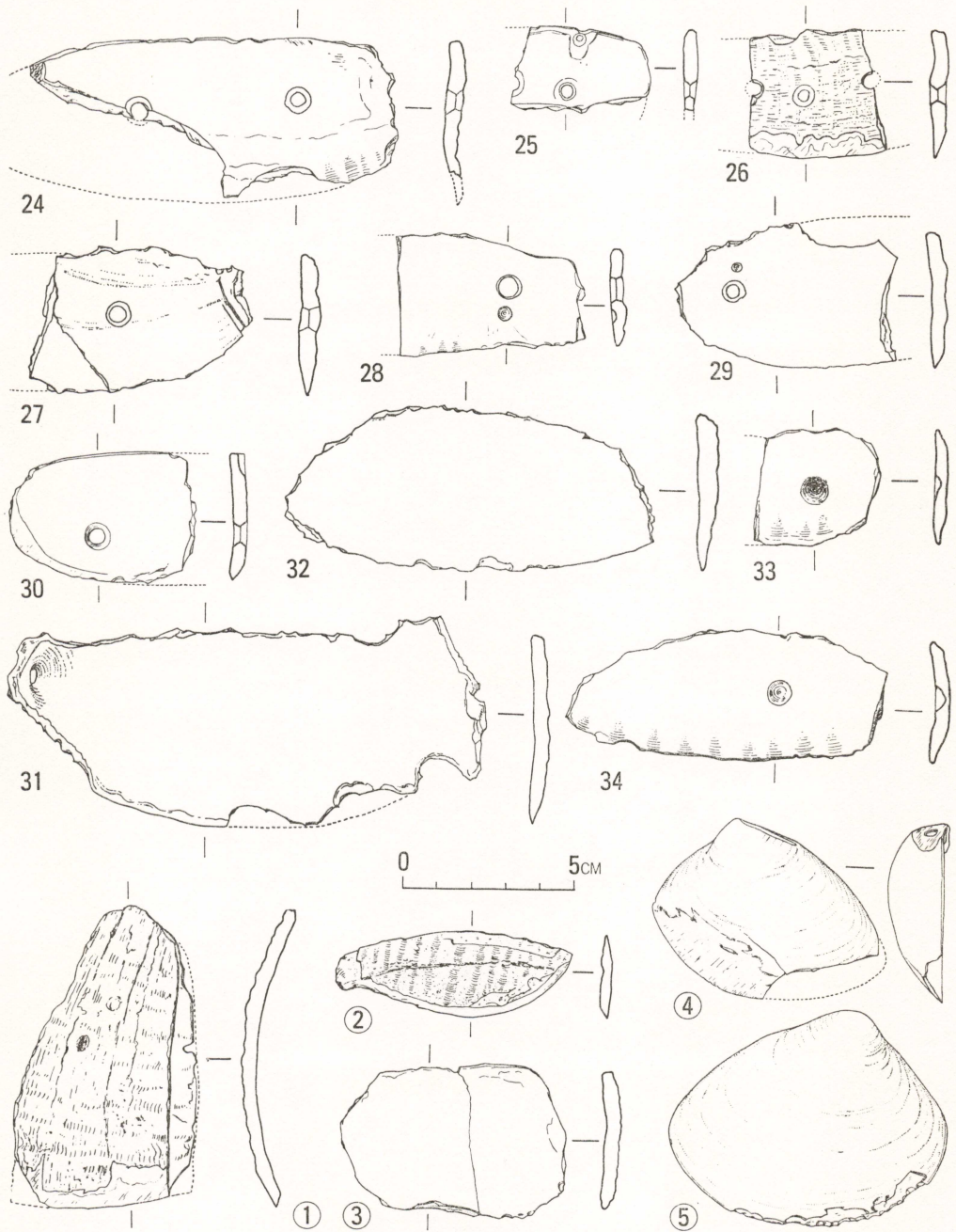


第2図

類別 I類=11・12・13・14・15・16・17・21. II類=18・19・20. III類=22. IV類=23.

時期別 中期(宮ノ台期)=11・14・15・17・18・20・21. 後期(久ヶ原期)=12・13・19・22・23. 時期不明=16.

出土遺跡 間口洞窟遺跡=11・12・14・15・16・17・18・19・20・21. 毘沙門B洞窟遺跡=13・23. 向ヶ崎B洞窟遺跡=22.



第3図

類別 I類=24・25・26・27・28・29・30. V類=31.

時期 中期(宮ノ台期)=25・26・28・29・30・33・34.

出土遺跡 間口洞窟遺跡

参考資料

①斧形貝器.

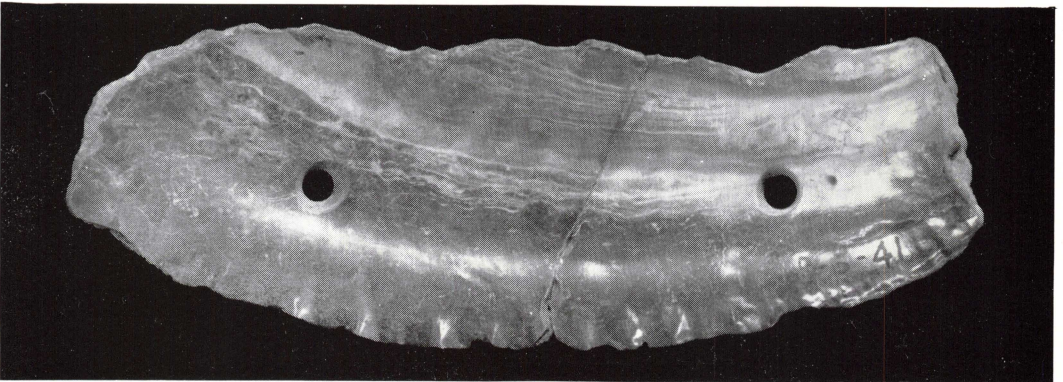
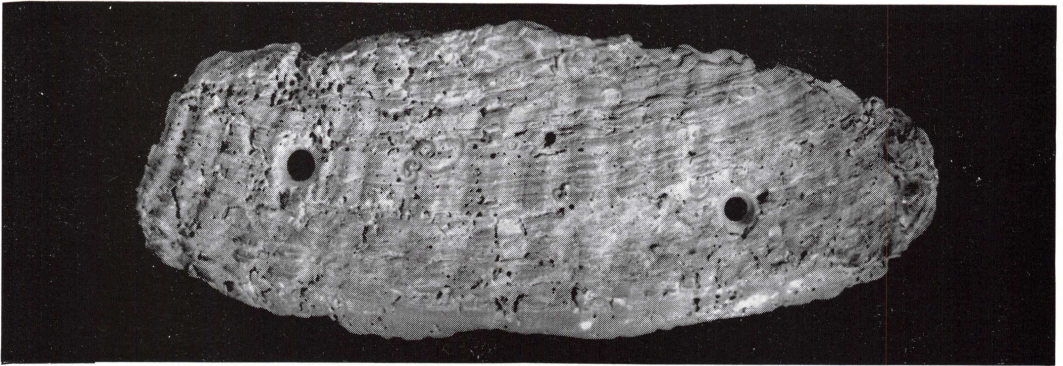
②ナイフ形貝器.

③搔器形貝器.

未製品=32・33・34

後期=24・27・31・32.

④磨製貝刃. ⑤貝刃



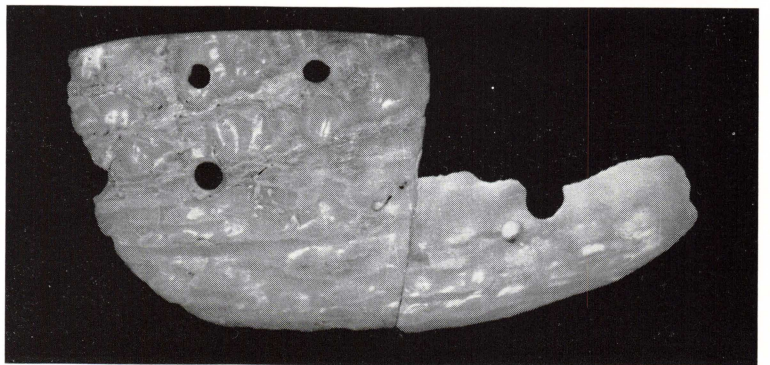
3 I 類 (中期)

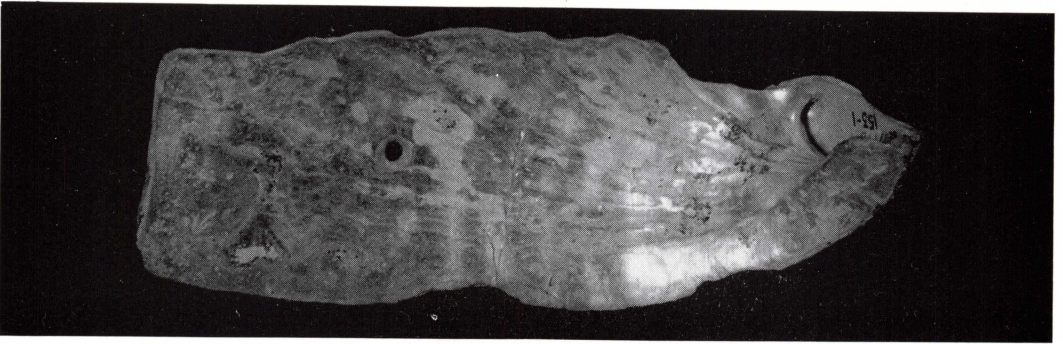
1 I 類 (中期)

10 I 類 (中期)

14 I 類 (中期)

(間口洞窟)





18 II 類 (中期)

23 IV 類 (後期)

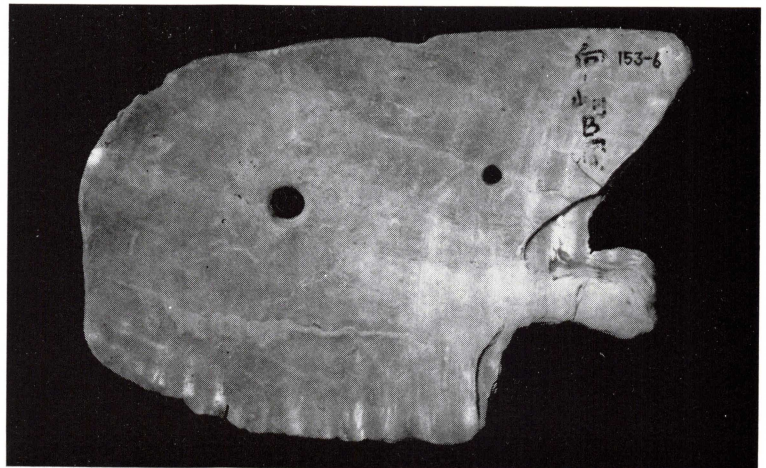
31 V 類 (後期)

22 III 類 (後期)

(18・31 間口洞窟)

(23 毘沙門B洞窟)

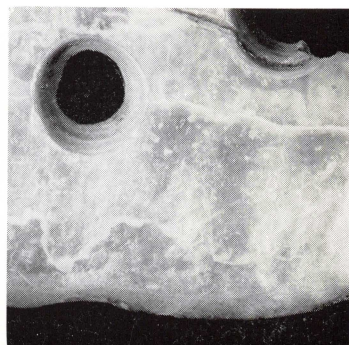
(22 向ヶ崎B洞窟)



図版 3



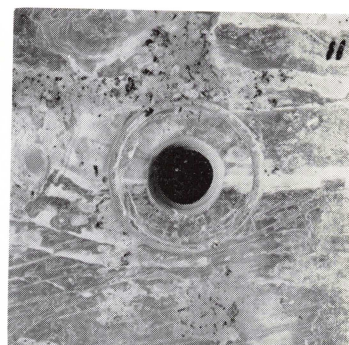
13 I類（後期）毘沙門B洞窟



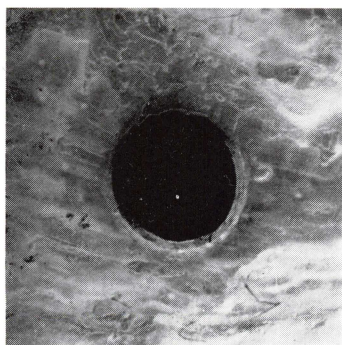
13 刃部



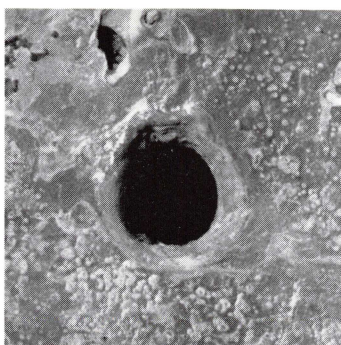
11 I類（中期）間口洞窟



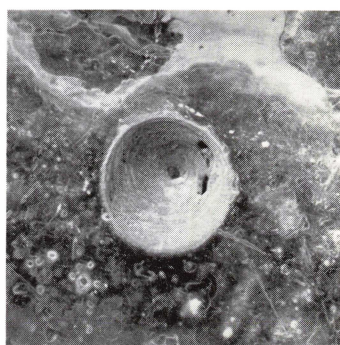
11 穿孔部



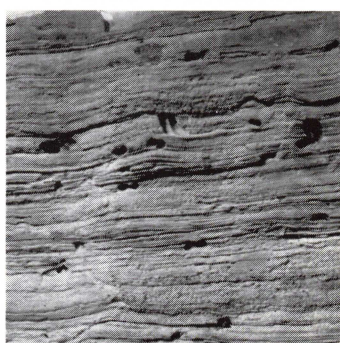
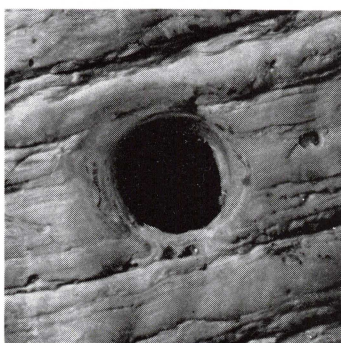
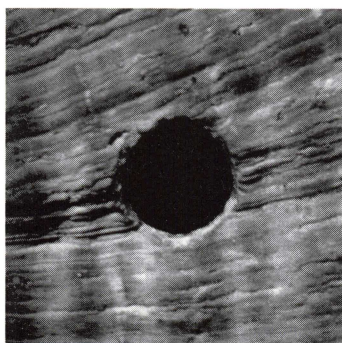
7 右側穿孔 内／外面



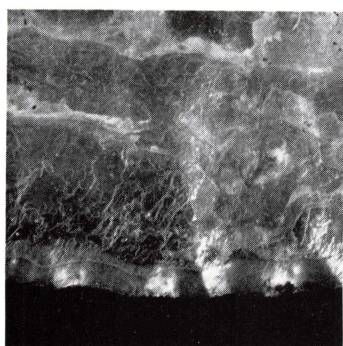
9 右側穿孔 内／外面



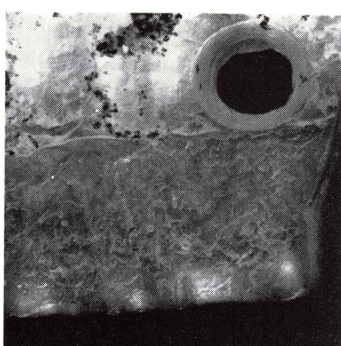
34 穿孔（未貫通）内／外面



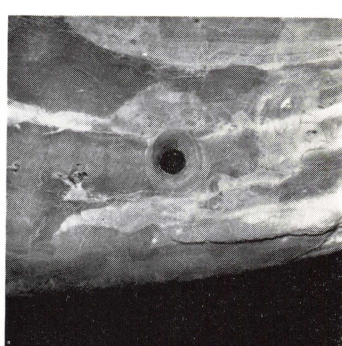
図版 4



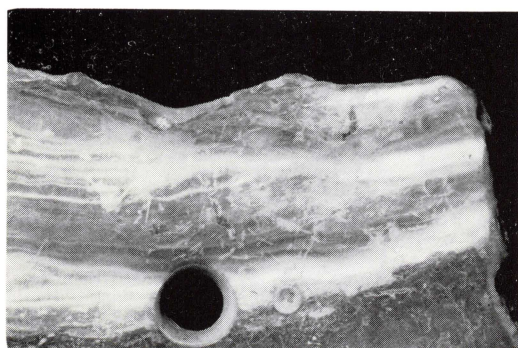
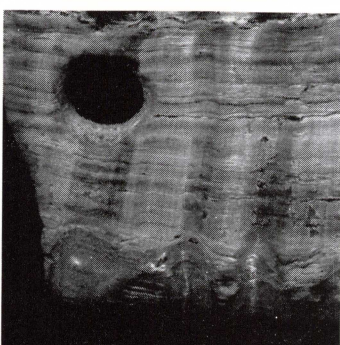
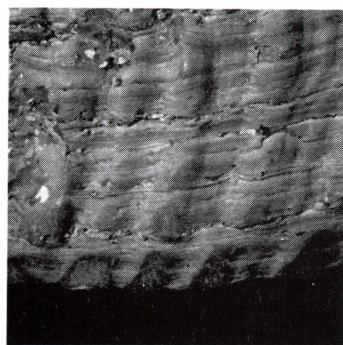
6 刃部(両刃)内/外面



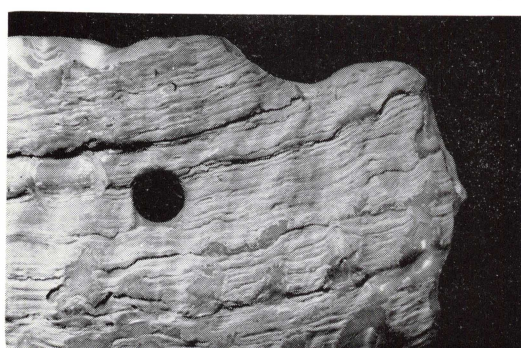
12 刃部(片刃)内/外面



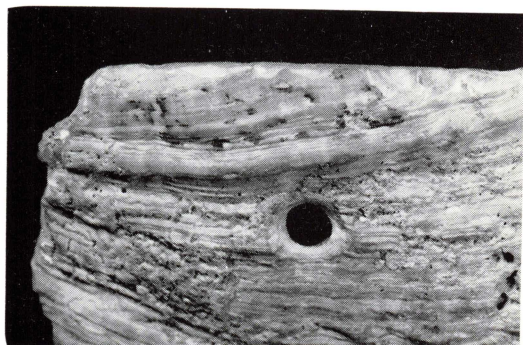
5 刃部(類自然縁刃)内/外面



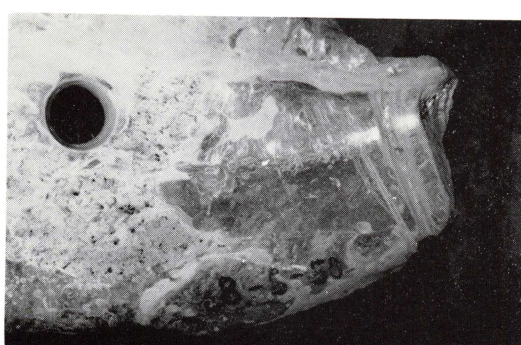
1 上端凹所(右側)



17 上端凹所(左側)



24 上端研磨状態



27 切断痕